

2022 年 4 月 24 日（日）「キリストを纏いて」

ガラテヤ 3:26-29

26 あなたがたは皆、真実によって、キリスト・イエスにあって神の子なのです。27 キリストにあずかる洗礼を受けたあなたがたは皆、キリストを着たのです。28 ユダヤ人もギリシア人もありません。奴隷も自由人もありません。男と女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからです。29 あなたがたがキリストのものであるなら、とりもなおさず、アブラハムの子孫であり、約束による相続人です。

【序論】

説教という営みは、基本的に言葉によってメッセージをお伝えするものですが、時には視覚的イメージに訴えかけることもあります。なぜなら、聖書に出てくる物語も、詩も、教理的な教えさえも、読者の想像性を掻き立てようとしているものばかりだからです。「百聞は一見に如かず」という諺がありますように、百の言葉を並べ立てても一の「見たもの」に敵わないことが多い。今日の説教においては、「衣服」のイメージを描くことができればと願っています。27 節に「**キリストを着た**」という表現が出てきますが、ここでは主イエスがまるで「コート」のようなものに例えられているのです。私たちにとって「服を着る」という営みはきわめて日常的なことでありますが、パウロは好んでこのイメージを用いました。これと似た表現が聖書の中には数多く出てきます。今日はこのイメージをまず念頭に置いて、テキストに取り組んでいきたいと思います。

【本論】

前回は「養育係」のように人間の監視役を務めていた「律法」から信仰者は解放されたという内容を学びました（3:23-25）。つまり、律法とは私たちの生活を見張り、基準にそぐわない生き方を容赦なく断罪してくるものであった。そのような息の詰まるような時代を過ごしてきた私たちに、解放の日が訪れたのです。それが、イエス・キリストとの出会いでした。主イエスは、神の法に従うか従わないかという基準ではなく、この存在を丸ごと神のものにしてしまうという新しい道を開いてくださいました。神との関係が良くなれば、もう心配はいりません。すべてが祝福の下に置き直され、その関係の中で人生が導かれていくという、抜本的な人生改革を主は行なってくださいましたのです。

本論 1. 信仰による神の子

あなたがたは皆、真実によって、キリスト・イエスにあって神の子なのです。 (3:26)

主イエスを信じた人には「**神の子**」という身分が与えられたと言われています。この表現は元々、神によって生み出されたイスラエル民族に向けて用いられたということを、まず認識する必要があります。

あなたはファラオに言いなさい。「主はこう言われる。イスラエルは私の息子、私の長子である。」 (出 4:22)

神に愛されている民、その神との人格的な関係を豊かに表現することばです。よって、本来このことばはイスラエル特有のものであったのですが、パウロはここで「**あなたがたは皆**」と、異邦人であるガラテヤ教会の人々に大胆に適用するのです。この身分は、彼らが自分の力で勝ち取ったものではありませんでした。「**キリスト・イエスにあって**」と言われるように、一方的な恵みによって神が招き入れてくださった。以前にもふれましたが、「**真実によって**」という部分は「**信仰によって**」と訳すことができます。信仰自体も私たちから出てきたのではなく、神が与えてくださったものである。これは4章に入って更に鮮明になるのですが、「**御子の霊**」すなわち「**聖霊**」が与えられることによって、私たちは初めて神を「父」と呼びうるようになるのです (4:6)。信仰告白は、聖霊の働きがなければ決してできるものではありません。

牧会人生においては、洗礼準備クラスを担当させていただくことがありますが、こちらでは学びを提供することはできても、その先の信仰告白はその方にしかできないということを毎度痛感します。知識として福音をお伝えすることはできても、その人の心が開かれてイエスを主と告白できるように導くのは、神の御霊の働き以外にはありません。

キリストにあずかる洗礼を受けたあなたがたは皆、キリストを着たのです。 (3:27)

ここに登場するのが「**キリストを着る**」という表現です。パウロが用いている似た表現として、「**天から与えられる住みかを上に着る**」(Ⅱコリント 5:2)、「**真理に基づく義と清さの内に、神にかたどって造られた新しい人を着る**」(エペソ 4:24)などがあります。読んでの通り、これは物理的に着ることのできるものではありませんので、彼がどうか「**救いのイメージ**」を理解してもらおうと手を変え品を変え綴っていることが分かりますでしょう。彼の思想のバックボーンには、創世記3章において、罪を犯したアダムとエバに神が着せてくださった「**皮の衣**」があると思われます。「**神である主は、人とその妻に皮の衣を作って着せられた**」(創世 3:21)。この衣によって、人の罪は覆われる。聖書は常に、「衣」の出处を神に帰しているのです。人は受動的にその衣を受け取る。

本論 2. 諸領域における差別の撤廃

さて、28 節では話題が展開されます。「キリストを着た」人々の集まり（教会）では、
どういう神の御業が起きてくるかという内容へと進んでいきます。それは、端的に言え
ば、あらゆる領域において原理的に差別が撤廃されるということです。

ユダヤ人もギリシア人もありません。奴隷も自由人もありません。男と女もありません。

あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからです。（3:28）

ここでは三つの人間社会の領域が挙げられています。

①ユダヤ人とギリシア人（民族）

②奴隷と自由人（社会的階層）

③男と女（性別）

① ユダヤ人とギリシア人（民族）

従来の考え方では「神の子」と呼ばれうるのはイスラエル人に限られていましたが、
今や主イエスを信じる者は誰でも「神の子」と呼ばれる時代が来ている。神の御前では
民族的優位性はなく、誰もが等しく罪人であり、恵みを受けるべき存在である。ユダヤ
人も異邦人も皆「皮の衣」を着て神の御前に立っている。しかし、その一人ひとりの顔
は、罪を責められて苦渋に満ちた顔ではなく、罪赦されて晴れやかであり、神を父とし
て見上げる喜びに溢れた、希望と喜びに満ちた顔です。

② 奴隷と自由人（社会的階層）

ガラテヤ書の文脈では、社会的階層が問題にされている箇所は見当たりませんが、パ
ウロは念のためここでふれています。社会的階層が特に現れた書はピレモン書と言える
かもしれません。ピレモンは裕福な主人の立場にありましたが、彼の許で奴隷として働
いていたオネシモは主人から逃げ出してローマ辺りをうろついていたようです。そこで
パウロと出会い、福音にふれて救われたのですが、このパウロが元主人であったピレモ
ンとつながっていることが分かりました。パウロは逃亡奴隷のオネシモを許してくれる
ようピレモンに手紙を書き送ります。社会的な身分としては、ピレモンは明らかにオネ
シモより上位にいますが、神の御前では両者ともに「皮の衣」を着ている存在に過ぎま
せん。どちらにも「罪赦された者」として受け入れ合うことが求められる。教会という
共同体の中で、リアルに社会的階層が撤廃された出来事と言えましょう。

③男と女（性別）

ガラテヤ書では、男女差別の問題も特に扱われてはいませんが、古代社会では「女」「子ども」は社会的に低く扱われていたという事実が背景にあります。福音書でさえ、群衆の人数を数えるときには男性しか考慮されていません（五千人の給食など）。しかし、主イエスと出会い、主を愛し従順を示していく人々の中に、女性が多く含まれていたことが確かに記されています。そもそも、神は人間を男と女とに造られ、両者の間には優劣は存在しなかったのですから、人は救われることによって本来の男女の関係性を取り戻していくことができるというのが、パウロの言わんとしているところでしょう。

28 節後半で「あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからです」と言われています。「一つ」という言葉は、原文では男性形が用いられており、「教会とはキリストをかしらとした一人の人である」ということが伝えられているようです。この世でどんな立場にある人も、同じ「皮の衣」「キリストの義」を着て、キリストのからだに属し、構成しているところ、それが教会であるということです。

本論 3. キリストとの共同相続

ここまで見てくると、29 節で言われている「キリストとの共同相続人」という事柄の意味が大変理解しやすくなると思います。

あなたがたがキリストのものであるなら、とりもなおさず、アブラハムの子孫であり、約束による相続人です。（3:29）

キリストを着ている人々は当然「キリストのもの」なのであって、キリストの持ち物がそのまま分け与えられる身分にある。キリストご自身が父なる神様から受け継いでいるものがあります。それは、神の国そのものであり、神の財産すべてです。それは本来、まことの神の子である主イエスにのみ特権的に与えられるはずのものでありましたが、私たちは主イエスの弟、妹として、その相続財産を溢れんばかりに分けていただくことができるようになりました。

では、私たちは実際に何を受け取るのか。ここでパウロは、「アブラハムの子孫」という表現を用いて、神がアブラハムに与えられた祝福の約束に立ち返ります。

- ・ 主はアブラムを外に連れ出して言われた。「天を見上げて、星を数えることができるなら、数えてみなさい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」（創世 15:5）
- ・ 主は言われた。「私はこの地をあなたに与えて、それを継がせるために、あなたをカルデアのウルから連れ出した主である。」（創世 15:7）

ここで神が言われていることは、「全世界を相続させる」という壮大なご計画です。アブラハムの信仰の子孫がそのような身分になっていくと、歴史の初めに約束されていたのです。そして、このことが主イエスによって成就し、主を信じる者が永遠の神の国を受け継ぐという祝福にあずかりました。

このことをもう少し整理しておきましょう。私たちはやがて来る新天新地を相続し、そのすばらしい地を神の「王子」「王女」として管理する身分が与えられているのです。しかし、私たちはやがて来る未来の希望だけを胸に抱いて生きているわけではありません。現在私たちが生きているこの地も、神のものであるならば、それすらも「私たちのもの」として与えられていることになります。そして、神の国の祝福をこの地にもたらしすべき存在として、既に神の国の「王子」「王女」として立てられているということになるのです。

【結論】

このことを学んでまいりますと、教会において隣人を見る見方がすっかり変わってしまうかもしれません。隣にいる兄弟姉妹は、神の国の「王子」「王女」であり、尊い存在なのです。皆「義の衣」を着ており、神に愛されていて、キリストのからだの一部とされています。互いをそのように認識し合い、尊敬し合い、心からの愛をもって接するものでありたい。そして、その交わりに多くの人々を招き入れることができるように、そのような教会を志していきたいと思います。

【祈り】

私たちに「義の衣」「イエス・キリスト」を着せてくださった、天の父なる神様。この輝く衣によって、私たちの罪はあなたの目にもはや見えないと言われています。肉眼では見えない衣ではありますが、それが自分のすべてを覆っているということを信じています。そして、信仰を同じくする仲間たち一人ひとりにも同様に被せられているということを信じます。内に宿っておられる御霊によって、互いを神の子と認識することができますように。相互に尊重し合い、祈り合う関係を築き上げることができるよう、お導きください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
エデンを去るアダムとエバに、やさしく皮の衣を着せ給うた、父なる神の愛、
信じる者にご自身の義を被せ、聖き者となし給う、主イエス・キリストの恵み、
聖徒を、互いに神の「王子」「王女」と認識させ、深い尊敬をもって関わらせ給う、聖
霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。